

ミヒャエル・エンデ著『はてしない物語』における はてしなさについて

小林良孝

Michael Ende 著 »Die unendliche Geschichte« (Thienemann Verlag 1979) は、428 ページの大作である。この作品の日本語訳 上田真而子／佐藤真理子訳 『はてしない物語』(岩波書店 1982 年) は、589 ページのずっしりと重い分厚い本である。エンデのこの部類の作品は Märchen-Roman と呼ばれている。童話 (Märchen) ではあるけれども、ありきたりの童話と異なって長編 (Roman) なのである。つまり、『はてしない物語』は名実ともに長編童話なのである。童話ではあっても大人が読んで不都合はない。実際、エンデの作品には、大人の愛読者も多い。しかしやはり、主たる読者層は子供たちであろう。

ところで、この »Die unendliche Geschichte«、あるいはこれの和訳の『はてしない物語』を読み始めた人は、その人がドイツ人であれ日本人であれ、あるいはその人が大人であれ子供であれ、はたして全員がこの物語の最後の 1 行まで読み通すであろうか。いや、とてもそうとは思えない。この物語の途中のどこかまでは読みはしたけれども、その後はまだ読んでいないままになっている場合もあり得るであろう。とすれば、その場合は、その読者の主観はいざ知らず、客観的にはこの物語はまだ読まれていないのである。物語はまだその後も続いているのだから、終っていない状態のままであり続けるのである。この場合は、この意味で、この物語ははてしない物語であり続けるのである。しかし、こんなことは、この »Die unendliche Geschichte« 『はてしない物語』に限ったことではない。どの本についてだって起こり得ることである。それよりも何よりも、こんな意味のはてしなさを論じる？ことは、実に愚劣だ、何の価値もない。ひとまずその通りであるとしておこう。ただ、この長編を最後の 1 行まで読むことは、誰にとってもかなり骨がおれることであろう。

こんな空想は捨てて、この »Die unendliche Geschichte«、『はてしない物語』の最後の 1 行まで読んだことにしよう。ところがこの物語は、次の言葉で終わっているのである。

Aber das ist eine andere Geschichte und soll ein andermal erzählt werden.⁽¹⁾

しかし、これはまた別の物語、これはまたいつか別の時に語られることになるであろう。

せっかく最後の1行まで読んでも、この『はてしない物語』はやはり話は終わっていないのである。この続きはどういう具合に続けられていくのか、どんな内容の続きがあるのか、ここではつまびらかにはされていない。しかしとにかく、この物語にはまだ必然的に別の続きの話があると、宣告されているのである。つまり、この物語は最後まで読んでもやはり文字どおりはてしない物語だったのである。

しかもこの「これはまた別の物語、これはまたいつか別の時に語られることになるであろう。」という預言めいた文言は、この物語の最後に1回だけ宣告されているのではなく、途中で語られている多くの物語に関連して、実は既に10回以上も繰り返されてきた言葉なのである。

Ⅲ. 「太古の沼ガメ モルラ」の章では、

さてこの老カイロンはけっしてエルフェンバイン塔にはもどってはこなかった。とはいえ彼は死んだのでも、草海原の緑の肌族のところにとどまっていたのでもなかった。彼の運命は、彼を全然予期せぬ全く別の道へ導いていったのである。しかし、これはまた別の物語、これはまたいつか別の時に語られることになるであろう。⁽²⁾ 实例1

また、XV. 「色とりどりの死グラオーグラマーン」の章では、

「さようなら、グラオーグラマーン、いろいろありがとうね！」と、彼はそっと言った。

「僕は帰って来るからね、きっと、きっと、帰って来るからね。」

そして彼は、扉の隙間をスルッとすりぬけた。そうするとその扉は彼の後ろですぐにゆっくりと閉まり始めた。

バスチアンは、彼のこの約束は守られることはないことを知らなかった。

ずうーっと、ずうーっと後に、彼の委託を受けて彼に代ってこの約束を守ってくれる人が居るのだけれども…。

しかし、これはまた別の物語、これはまたいつか別の時に語られることになるであろう。⁽³⁾ 实例2

また、XVII. 「勇士ヒンレックのための竜」の章では、

彼らが披露した物語や歌は、手に汗を握るようなものや、愉快なものや、悲しいものや、いろいろあった。しかしそれらをひとつ一つ披露すること

は、ここではとてもできない。それらはまた別の時に語られることになるであろう。⁽⁴⁾ 実例 3

また同じく、「勇士ヒンレックのための竜」の章の中では、

ところで勇士ヒンレックはといえば、彼は首尾よく冷たい炎の国モルグルにたどりつき、化石化した森ヴォッドガバイにわけ入って、ラーガー城のまわりにめぐらされていた三つの堀を渡ることもできた。鉛の斧を見つけ出し、竜スメルクを討ちとり、オグラマール姫を救い出し、彼女の父王のもとへ連れ帰った。姫は彼と結婚したいという気になっていたのだが、今度は彼の方にその気がなくなっていた。しかしこれはまた別の語、これはまた別の時に語られることになるであろう。⁽⁵⁾ 実例 4

また、XXI.「星僧院」の章では、

バスチアンは、イハがとぼとぼ離れて行く後ろ姿を長い間見送っていた。イハを追いやったことを思うと心から喜ぶ気にはなれなかった。彼は自分の豪華なテントの中へ入って、柔らかいクッションの上に身を横たえ、天井を見つめていた。何回も何回も、イハの最大の願いをかなえてやったのだと、自分に言い聞かせた。しかし、自分にそう言い聞かせても陰うつな気分は晴れなかった。誰かが誰かのためを思っているにしても、そのタイミングと理由が大切なのだ。

しかしそれはバスチアンにだけ言えること、イハのほうは本当に翼のある白い雄馬を見つけ、そしてその馬と結婚した。そして後に息子を産んだ。その息子は翼のある白いラバで、パタプランと名づけられた。彼はファンタージェンの国で、おおいに評判になった。しかしこれはまた別の物語、これはまた別の時に語られることになるであろう。⁽⁶⁾ 実例 5
また、同じくXXI.「星僧院」の章の中では、

ところで、この夜、星僧院ギーガムではこの三人の沈思黙考師の間で初めて決定的な意見の相違が生じ、その何年か後にはついに兄弟関係を解消し、予感の母ウシュトゥ、観照の父シルクリー、伶俐の息子イージブは各々自分の僧院を建立した。しかしこれはまた別の物語、これはいつかまた別の時に語られることになるであろう。⁽⁷⁾ 実例 6

XXIII.「昔帝王たちの都」の章では、

ビヤクシンの茂みの中にはピカピカ光る物がとり残されていた。それはバスチアンが無くしたゲマルの帯だった。バスチアンは、それを無くしたことに気づかず、その後もずうっとその帯のことは全然考えなかった。そ

の帯はイルリアンがせっかく炎の中から救い出したものだったのだが、それは無駄に終わったわけだ。

その2、3日後、そのゲマルはカササギに発見された。そのカササギはこのピカピカ光る物がどんな働きのあるものかつゆ知らず、それを巣に持ち帰った。はたせるかなこのことによってまた別の物語が始まるのだが、これはまた別の時に語られることになるであろう。⁽⁸⁾ …………… 実例7
同じく、XXIII、「昔帝王たちの都」の章の中には、

「シカンダ！」と、バスチアンは吹きすさぶ嵐の中でそっと言った。「おまえとはこれで永遠のお別れだ。友に向っておまえを引き抜く者によって二度とふたたび禍がもたらされてはならぬのだ。僕とおまえに起きたことがことごとく忘れ去られるまでは、誰一人おまえをここで発見することがあってはならぬのだ。」

それから彼はその穴を埋めもどして、最後にその上に苔や小枝を置いた。誰にもそれが見つけ出されることがないように。

シカンダは今もまだそこにある。遠い遠い未来に、危険なくそれに触れることが許される者が来るであろう。——しかしこれはまた別の物語、これはまたいつか別の時に語られることになるであろう。⁽⁹⁾ …………… 実例8
また、XXIV、「アイウオーラおばさま」の章の中では、

…三人（ヒスバルト、ヒドルン、ヒクリオン）は、バスチアンに誓った忠誠の誓いを破る気にはなれなかったので、ファンタージェンの国じゅう彼を探しまわることに決めた。しかし、どの方向へ進むべきかについては意見が一致することができなかつたので、それぞれ自分の決断で進むことにした。そして三人とも数々の冒険に出会った。結局は無駄に終わった彼らのこの探索についての報告は、ファンタージェンの国には数々ある。しかしこれはまた別の物語、これはまたいつか別の時に語られることになるであろう。⁽¹⁰⁾ …………… 実例9

と書かれているのである。そして、この『はてしない物語』の最後も、上に引用した9個の実例と全く同じ文でしめくくられているのである。

コレアンダーさんは彼を店の入口のドアのところまで送ってきた。そのガラスのドアの方へ近づいて行くと、彼のお父さんが道路の向こう側に立って、彼を待っていた。その姿が、ガラスドアの上の、裏側から見える文字と文字の間のむこうに見えた。お父さんの顔は輝きそのものだった。

バスチアンは勢いよくそのドアを開けた。ドアにとりつけてある真鍮の

呼びリンが激しく鳴りはじめた。バスチアンはその輝きに向かって駆けて行った。

コレアンダーさんはドアをそうっと閉め、その二人の後ろ姿を見送った。

「バスチアン・バルタザール・ブックス」、彼はつぶやいた。「もし私が間違っていなければ、おまえはまだまだたくさんの人々にファンタージェンへ行く道を教えてあげることだろう、その人が私たちに生命の水を持ってきてくれるようにね。」

コレアンダーさんは間違っていなかった。しかしこれはまた別の物語、これはまたいつか別の時に語られることになるであろう。⁽¹¹⁾……… 事例 10

これら 10 個の事例に共通しているのは「これはまた別の物語」という言葉と、「これはまた別の時に語られることになるであろう」という言葉である。

では、「これはまた別の物語」という言葉で何が意味されているのか。この言葉によって、これらいずれの物語においても、その物語の主人公の不滅とその主人公にまつわる物語の新展開が約束されているのである。例えば第 1 例においては、老カイロンは、ここで命がはてるのではない。この後も生きのびて、新しい物語を展開して行くことが約束されているのである。第 2 番目にあげた事例においても事態は同じである。主人公である色とりどりの死グラオーグラマーはここで消滅するのではない。更に存在し続けて、彼にまつわる新しい物語の新たな展開が約束されているのである。このことは上に引用したすべての事例において共通していることである。はてしなく続いて行くのは、主体の持続性とその主体にまつわる物語の更新性ないしは創造的進展である。

「これはまたいつか別の時に語られることになるであろう。」この言葉は、この新たな物語が、実際に人に語られることになることを予言したものである。では、誰によって語られることになるのだろうか。エンデは、第一にはこの本の読者ひとり一人によって語られることを期待しているのである。つまり、その新たな物語が、単に読者の頭の中の観念の集積に終るのではなく、読者によって実際に語られることによって、客観的な存在の中へ置きかえられることになるであろうと、予言しているのである。つまり、観念が読者によって客観的に存在化されることを期待をこめて予言したものである。

ここでひとまず結論を出せば、この『はてしない物語』のはてしなさの本質は、持続性と創造性、すなわち創造的持続性にある。では、この創造的持続性

は、この物語の中で、いかなる形で実現されているのであろうか。この持続と創造の運動には、全然定まった方向性がないのであろうか。あるいは、一定の方向性があるのであろうか、あるいは何らかの一定の型があるのであろうか。この疑問に対する答を、雑多な物語の集積である「Die unendliche Geschichte」『はてしない物語』の中から探し出すことにしよう。

三次元的楕円環運動

もし表紙がその本の内容を裏切っていないとすれば、その本を開いて読まなくても、その本の表紙を見るだけで、その本の内容に関する正しい情報が得られるはずである。それ故、この本を開いて読み始める前に、まずはこの本の表紙を観察することにしよう。

念のために断っておくが、今、手にしてながめている本は、1979年に Thienemann 社から出版されたこの本の初版本である。サイズはA 5版の普通の縦長の本である。おもて表紙も背もうら表紙も全く同じ色、少し暗い感じの赤、である。何の意図もなく表紙の色を決めたはずはない。エンデ自身が決めたものか否かは知らないけれども、表紙のデザインもエンデ自身が決定したものとして考察することにする。つまり、表紙のこの色、少し暗い感じの赤もエンデが決めたものとする。エンデがルドルフ・シュタイナーの思想に精通していたことは、自他共に認めていることである。⁽¹²⁾エンデ自身が赤という色について直接話しているところを筆者は知らないので、R. シュタイナーの所説によって、赤という色の意味を探ってみることにしよう。

黄は外へ輝き、青は内へ輝き…、そして赤は両者を中和して一様に輝きます。⁽¹³⁾

赤は、離心運動と求心運動とが完全に均衡している運動、すなわち完全な円または完全な円周運動を意味しているのである。しかし、この表紙の赤は原色ではなく、少し暗い感じの赤である。この点を考慮に入れれば、この表紙の色は不完全な円または不完全な円周運動を意味していることになる。

たいして注意もせず、ただサッと見ただけでは、あるいは見る角度がたまたま悪ければ、この赤い表紙には何も書いていないように見える。角度を変えながらよく見れば、図と文字が見えてくる。手に取って見ると、この本の表紙は、紙表紙ではなく、堅い厚紙に赤い布を張り合わせたしっかりしたものなのである。この表紙の上の図や文字は、描かれたものではなく刻印されたものである。従って、目で見るとよりは手でさすってみれば、デコボコする感じでそれがあ

ことはよりよくわかる。

まず、刻印されている図は、横幅 11cm弱、縦 12cm程の大きさの少し縦長の長方形である。更にこの長方形の真中には横幅が 9 cm弱、縦が 11cm程の楕円形が刻印されている。更にこの楕円形の図の中には、»Die unendliche Geschichte« という書題が浮き出す形で刻印されている。

これらの図をもう少し詳しく見て見よう。まずは外枠を形成している正方形に近い長方形。これは中央から右半分と左半分に分けられていて、右半分は見る方向をくふうすると少し明るく輝くようになっている。しかし、左半分はこの本の表紙全体の色と同じ色、輝きのない少し暗い感じの赤である。この明と暗からごく自然に連想することは、昼と夜である。地球上のあらゆるものは、昼の営みから夜の営みへ、夜の営みから昼の営みへと循環する。あるいは、昼は夜となり、夜は昼となる。これの反復である。いずれにせよ、明と暗の領域・世界が、この横幅 11cm弱、縦幅 12cm程の長方形の中におさまっているのである。

この長方形の図案が何を意味しているのかは、この本を開いてこの物語を読んで行けば具体的に明確になるはずである。しかしこの本を開いて読むのは、もう少し後のお楽しみとして、今はこの本以外の所でこの図案の意味を解明する手掛かりとなると思われるエンデ自身の言葉を探してみることにしよう。

エンデは、井上ひさし氏との対談の中で次のように言っている。

エンデ …ヨーロッパには知ることと信じることを分けるという宿命的、伝統的二分法がありますが、真の現代人は、ちょうど自然科学と同じ明晰さで超感覚的世界も見ることができて、初めて納得する。そうした意味で、先の二分法に根ざす古い宗教的信仰と自然科学的方法とは、どちらも克服されるべき時代に来ています。⁽¹⁴⁾

エンデのこの言葉を今眺めている表紙の長方形の図に当てはめれば、長方形の内部を二分している明の部分と暗の部分は、どちらがどれに当たるかは別として、いずれか一方は宗教的信仰に対応し、他方は自然科学に対応しているということになる。この二分法は克服されるべきである、というのがエンデの主張である。同じ主旨のことは、エンデと安野光雅氏との対談の中でも述べられている。

エンデ …西洋の犯した根本的な誤りは、神を光で、悪魔を闇で表したことです。色だって、闇なくしては生まれ得ないのだし、光だけで成り立つ世界は、全く闇の世界と同じように、何も見ることはできません。古代アジアの数学では、一こそが最大の数でした。二は、数としてはむしろ小

さくなる。すべての対立をより大きな全体性のなかに包括する、見える世界、見えない世界、すべてを包括する一体性としての一。もともとはこの一体性こそを、神と呼んだのです。⁽¹⁵⁾

これを再び表紙の長方形の図に当てはめれば、長方形の内部の明の部分は光・神に相当し、暗の部分は闇・悪魔に相当することになる。あるいは、明の部分は見える世界に、暗の部分は見えない世界に相当することになる。そして、この安野光雅氏との対談の中でも、この二分法は西洋の犯した根本的な誤りである、と主張されているのである。

これら二つの対談を参考にして、この表紙の長方形の図を考察すれば、エンデのこの本の著作の目標は、一つのを明と暗の二つの部分に分けることにあったのではなく、明と暗が本当は何を意味しているのかは今のところはまだ明らかにはなっていないにしても、この明と暗の二つのものを一つのものに、全一のものに統合することにあつたと見るべきであろう。

この長方形の図についての観察は、ひとまずこれくらいにして、この横幅約11cm、縦約12cmの長方形の刻印の真中にある楕円形の図の考察へ話を進めよう。この楕円はこの外側の上に考察した長方形とちがって、線によって形成されているのではなく、幅7～8mm程の帯紐によって形成されている。この帯紐の上には何か刻印されている、ないしはこの帯紐は何かから成り立っているが、これについてはもう少し後にふれることにする。この楕円は左右の短径が最大部分で約8.5mm、上下の長径が最大部分で約11cm、その外側の長方形の辺と接している所は一箇所もない。つまりこの楕円形状のものは、外側の長方形の中にすっぽりとおさまった楕円形のドーナツのようなものである。

今重要なのは、このドーナツのようなものの形状が楕円であるということである。円は一つの定点（中心点）からの距離が常に一定である点の軌跡である。これに対して楕円は、二つの定点（中心点）からの距離の和が常に一定である点の軌跡である。すなわち、楕円は二つの中心を持つ円なのである。円は一元論的世界を表し、円周は一元論的運動を表す。これに対して楕円は、二元論的世界を表し、楕円周は二元論的運動を表す。

では、この本の表紙に刻印されている楕円の二つの中心とは何であろうか。この楕円を包摂している長方形が上に考察したように、明の領域と暗の領域から成り立っていることを考慮に入れれば、この楕円の一つの中心は明、もう一つの中心は暗と考えるべきである。そうすれば、この楕円は、明・暗二元論によって成り立っている世界を表し、この楕円周は明・暗二元によって繰りひろ

げられる無限（きれ目のない）運動を表している。

既に引用した対談の中でエンデ自身が述べていたように、二元論的世界は克服されるべき世界であり、一元論的世界こそは実現されるべきユートピア的世界である。

楕円は不完全な円である。本稿 190 ページに指摘しておいたように、この本の表紙の色、原色でない赤、少し暗い感じの赤は、不完全な円を示唆している。不完全な円とは、可能性としてはいろいろな形の円があり得るけれども、この本の表紙の中では、この楕円しかない。すなわち、この本の表紙の色は楕円を意味しているのである。それ故、この色は、明・暗——これが何を意味しているかは後に明らかになる——二元論によって繰りひろげられる世界を意味しているのである。

次に、この楕円の内部に目を向けてみよう。この部分には、»Die unendliche Geschichte« というこの本の標題が刻印されている。つまり、»Die unendliche Geschichte« は、明・暗二元論によって形成される世界の中におさめられているのである。つまり、»Die unendliche Geschichte« の形状は楕円形であり、その外延は二つの中心、明と暗からの距離の和が常に一定な点の軌跡上を移動することになる。それ故、『はてしない物語』のはてしなさは、一つには楕円周をはてしなくたどるはてしなさであるはずである。それ故、この楕円運動に持続性と創造性が託されているはずである。

更に注意すべきことは、この楕円は平面に描かれているものではなく、刻印されたものであるということだ。平面に描かれただけの楕円は、平面は縦・横二次元であるから、その楕円も縦・横二次元の楕円となる。二次元的楕円周運動は全く同じ線を無限にたどるだけとなる。これでは無限性は表現され得るけれども、新局面・変化・創造性は表現され得ない。それ故、この二次元的楕円周上の循環は「悪魔の環」と呼ばれている。悪魔の環はあってはならない環、克服されるべき環なのである。それ故、『はてしない物語』の楕円は二次元であってはならないのである。

この本の表紙の楕円は描かれているのではなく、刻印された楕円である。刻印されているわけだから、縦・横の広がりがあるだけではなく凸（高）・凹（低）がある。真上から見れば楕円形という形しか見えないけれども、ななめ横から見れば高低が見える、つまりこの楕円は立体的楕円・三次元的楕円になっているのである。この高さは理論的には層に分割することができるのである。さすがに、手で触って、あるいは目で見て、明瞭に複数の層であることがわかるよ

うにはなっていないけれども、我々はこの高低の中に層構造を読み取るべきなのである。そうすれば、この表紙の上にのせられている楕円は、螺旋形の楕円、すなわち楕円形の螺旋状のバネのような重層的なものとなるはずである。これによって始めて、運動の無限性（はてしなさ）と新局面への進展（創造性）が同時に可能となる。はてしない創造性が実現されるためには、この楕円の中の「Die unendliche Geschichte」というこの本の標題自体が三次元化されていなければならない。実際、この標題を表す文字は凸状になっている。

次は、この楕円を形づくっている幅7～8mmの帯紐状の部分の考察に移ろう。この帯紐は、2匹の蛇から成り立っている。この楕円の右半分を形成している蛇は、尾を真上にし頭を真下にして、背を外側の明の領域に向け、腹を楕円の中心方向へ向けている。つまり、この右側の蛇は明の原理を表している蛇である。他方、この楕円の左半分を形成している蛇は、尾を真下にし頭を真上にして、背を外側の暗の領域に向け、腹を楕円の中心方向に向いている。つまり、この左側の蛇は暗の原理を表している蛇である。そして、右側の明の原理の蛇はこの楕円の一番下の所で左側の暗の原理の蛇の尾をくわえ、左側の暗の原理の蛇はこの楕円の一番上の所で右側の明の原理の蛇の尾をくわえている。こうして、明の原理の蛇と暗の原理の蛇は、互いに相手の尾をくわえ合う形で切れ目のない楕円形の輪を形づくり、その輪の中に「Die unendliche Geschichte」を閉じ込めているのである。明の原理の蛇と暗の原理の蛇が相互に相手の尾をくわえ合い呑み込み合うことによって、明の原理と暗の原理の相互嵌入・相互取り込みが実現されているのである。

次に、この2匹の蛇の頭の方に注意しよう。わかりやすいように、この楕円を時計の文字板と見なしてみよう。まずこの楕円の右半分を形成している明の原理の蛇を見てみよう。この蛇の尾は一番上の12時に位置し、頭が一番下の6時に位置している。つまり、この右側の蛇は零時から6時方向へ向かって進む姿勢を取っている。左側の蛇も進む方向は同じである。尾が一番下の6時の所にあつて、頭が一番上の12時の所にある。つまり、明の原理の蛇と暗の原理の蛇とがつながつて、時計を零時から12時までひと廻りする形状になっている。つまり、この2匹の蛇によって時計方向の動き、右まわりの動き、順の動きが示されている。

では、エンデはこの順の動きによって何を示唆しているのであろうか。この意味はこの『はてしない物語』を開いて中を読めばわかるはずであるが、今はこの本の表紙の謎ときをしている段階であるから、開いて読むわけにはいかな

い。それ故、この本以外のどこかにヒントがあるか、探すことにしよう。ヒントはある。それは『モモ』の中の、モモとマイスター・ホラの次の会話である。

「それで、もし私の心臓が鼓動を打つのをやめたら？」と、モモはたずねた。

「その時はね、」と、マイスター・ホラは答えた。「おまえの時間も止まるのだよ。こういうふうに言うこともできるだろうね。その時は、おまえは自分自身で、おまえのすべての昼夜を、おまえのすべての歳月の時間を通りぬけてさかのぼって行くのだよ。つまり、おまえの一生涯を逆方向にたどって行くことになるのだよ、…」⁽¹⁶⁾

つまり、人は死ねば時間を逆方向に、すなわち時計を逆まわり・左まわりにさかのぼって行くことになる、というのがエンデの思想なのである。そうすれば、この『はてしない物語』の蛇によって示されている右まわり・順方向のまわり方は、死の逆方向すなわち生を意味しているはずである。明の原理の蛇も暗の原理の蛇も共に生を意味しているはずである。ただし、全く対照的な原理によって営まれる生の循環を意味しているはずである。つまり、この「Die unendliche Geschichte」は、完全に生の世界の中の物語になるはずである。

では次に、何故蛇がこの物語の表紙に配置されているのであろうか。いったいこの蛇はどういう蛇なのだろうか。旧約聖書の創世期3に登場する蛇と何か関係はあるのだろうか。それともギリシア神話の中に登場してくる数々の蛇のいずれかと何か関係はあるのだろうか。あるいはまたこの蛇は、全く別の世界の蛇と関係しているのであろうか。なにしろ蛇は、世界中の伝説や神話の中で非常に頻繁に登場してきて、いずれの世界においても非常に重要な役割をはたしているものなのである。この表紙のデザインを見ているだけでは、確定はむずかしい。とはいえ、この表紙のデザインで絵柄っぽいのはこの蛇だけである。あとは長方形を形成している直線と、楕円を形成している曲線だけである。この蛇は、この本の内容と密接な関係があるにちがいない。そういえば、エンデは、『オリーブの森で語りあう』という本の中で次のように語っている。

エンデ …『はてしない物語』というのは、昔ながらの意味での教養小説で、そこでは心の成長というのが描かれている。だから産業社会やテクノロジーなどの問題とはいっさい関係ないんだ。…なにしろバスチアンにとっては、まったく個人的なオデュッセイアが問題なんだから。」⁽¹⁷⁾

また、更に次のようにも言っている。

エンデ …オデュッセウスはオデュッセイアの中にしか存在できず、ヨー

ゼフ・Kはカフカの宇宙のなかにしか存在できない。どんな芸術の世界も自律しているので、現実の生活に直接あてはめるわけにはいかない。これらの物語が本のおもて表紙と裏表紙のあいだに成立しているということも、また結構なことなんだ。想像力の魔術的な領域こそ、『はてしない物語』のファンタジーエン国なわけで、ぼくたちはときどきそこへ旅して、見者となるんだ。それからぼくたちは、外的現実にもどることができる。変化した意識をおみやげにしてね。そしてこの外的現実を変化させる、あるいはすくなくとも外的現実を新しい角度から見て体験することができる。ファンタジーエン国で手に入れたものを、バスチアンは、この想像の国の境界をこえて現実の国に、なにひとつ持ち帰ることはできない。2匹の蛇がその見張りをしている。バスチアンはなにひとつ持ち帰れない。バスチアンじしんは別だけど。生命の水だってこぼしてしまうのだが、それでもバスチアンはお父さんにそれをもって帰ることができる。バスチアンじしんをとおしてね。⁽¹⁸⁾

エンデは、『はてしない物語』をホメロスの『オデュッセイア』に見たて、バスチアンをオデュッセウスに見たてている。バスチアンのファンタジーエン国の旅をオデュッセウスの地中海を経巡る帰郷の旅に見たてているのである。しかし、『イーリアス』とこれに続く『オデュッセイア』の中にはアカイア軍側の英雄ピロクテテースを咬んだ毒蛇以外、重要な意味を持つ蛇は登場しない。しかし、ピロクテテースに咬みついた毒蛇は、この『はてしない物語』の話の筋にはふさわしくなさそうである。それでは蛇探索の領域をギリシア神話の世界まで広げて見てはどうだろう。そうすれば、蛇はうじゃうじゃいる。

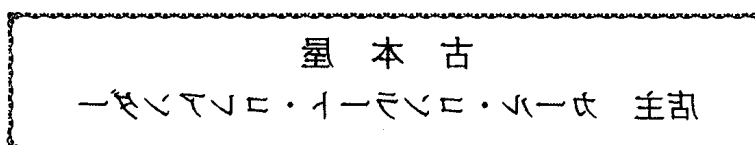
ファンタジーエン国の蛇は、生命の水を守っている蛇だという。生命の水を守る蛇＝生命を守る蛇＝生命を病から守る蛇＝生命を病から癒す蛇。そうだ！この蛇は医神アスクレーピオスの神獣としての蛇だ！とすれば、この2匹の蛇にとり囲まれているこの「Die unendliche Geschichte」は癒しの物語であるはずである。しかし、この推理が正しいか否かは、この図柄だけでは決定できない。それは、実際にこの物語を読んでみなければわからない。

この本の表紙の観察の最後に、もう一度、いちばん外側の横幅11cm弱、縦12cm強の長方形に目を向けてみよう。筆者にとってはこれはこの物語への入口のように見えてならないのである。右の明の部分の扉と左の暗の部分の扉が中央で合わさっている観音開きの入口のように見えるのである。ただし、右の扉と左の扉の合わせ目は中央上下一真線ではない。「Die unendliche Geschichte」と

いう標題を真中にとり込んでいる2匹の蛇によって形づくられている楕円形の部分は右側の明るく輝く扉と一体構造になっていて、この楕円の左半分は左の暗の扉の中腹へ張り出している構造になっているのである。だから、この扉を開けても、この楕円形の部分が真中から左右に割れることは絶対にないし、»Die unendliche Geschichte« という標題もその真中から左右に割れることも絶対にない構造になっているのである。さあそれでは、この入口の真正面に立って、その真中の unendliche(はてしない)という文字のあたりに両手をあてて、グイッと押してみましょう。あっ、開きました!!! さあ、この»Die unendliche Geschichte«の中へ入ってみましょう。

この手のこんだ表紙のデザインによって、本当は何が意味されているのかを解明するために、まず初めにこの物語を次の四つの場面に分けて、内容を明確におさえておかなければなりません。

第1場



この本の本文の第1ページの冒頭には、章立てもなく、上記のように、商標がガラス戸の裏側から見える形で、すなわち鏡像の形で書かれている。すなわち、この物語はコリアンダー古本屋の店内から始まったのである。冷たい雨の降りしきる11月の朝、まだ8時を少しまわったばかり、10歳頃の少年バスチアンが登校途中、この古本屋の店内へ駆け込んできたところだったのである。こうして登場してきたバスチアン・バルタザール・ブックス、この少年がこの物語の主人公である。バスチアンは、背は低く、肥っていて、エックス脚で、頭髪はこげ茶色で、顔色のさえない子供だった。要するに、バスチアンは醜い精彩のない弱々しい子供だったのである。

この古本屋の主人コリアンダー氏は、子供嫌いの今にも咬みつきそうなブルドックのような顔をした恐ろしいおじさんであった。コリアンダー氏はバスチアン少年の挙動を不審に思っ、頭っから疑って次のように言う。

「きっとおまえは、どこかのレジでお金でもかっぱらったんだろう。それともどこかのばあさんをなぐり倒したとか、それとも何か今どきのおまえみたいなやつらのやりそうなことをやらかして、警察に追いかけてられているのだろうか？」

バスチアンは頭を横にふった。

「白状するんだ！」コレアンダー氏は言った。「いったい誰から逃げてきたんだ？」

「他のやつらからです。」

「他のやつらって、いったい誰だ？」

「僕のクラスの連中からです。」

「どうしてさあ？」

「やつらは…やつらは僕をいじめるんです。」

「そいつらはいったいおまえに何をやるんだい？」

「学校の前で僕を待ち伏せしているんです。」

「それで？」

「僕にいろんなことをはやしたて、こずきまわしたり、馬鹿にして笑いものにしたりするんです。」⁽¹⁹⁾

コレアンダー氏に問われるままに、つらい身の上を語った。それによれば、バスチアンは次のような子だった。

① 日頃から級友からひどいいじめに会って悩み苦しんでいる。しかし、彼はいじめる学友に対して歯向かうことができない。弱虫、臆病者であった。

② 背が低く、肥満体で、X脚で顔色が悪い。容姿が醜く、劣等感にさいなまれていた。

③ のろまで非力で不器用だったので、体育は特に不得意だった。

④ 他の科目の成績も悪く、去年は落第した。要するに、落ちこぼれの生徒だった。

⑤ たった一つの得意技は、自分で物語を作ることであった。しかし、これでも彼には災いとなった。友達の前で作り話をすると、ほら吹き、いかさま野郎とののしられる始末だった。それで一人で自分に語っていると、周りの者からは、くるくるパア、できそこない、と馬鹿にされるのがおちだった。

⑥ 学校の先生も彼の気持ちは理解してはくれなかった。他の子供と一緒になっからかったり、腹立ちまぎれにどなりつけたりするだけだった。つまり、彼には仲のいい友人も居なかったし、理解してくれる先生も居なかった。要するに学校では完全に孤独だった。

⑦ 母親はもう死んでいなくなっていた。

⑧ 歯科技工士をしている父親と二人暮らしだったけれども、母が死んでから

はこの父親との温かい心のかよい合いは何も感じられなくなっていた。こうして、家に帰ってもやはり完全に孤独であった。

こうして追いつめられたバスチアンが逃げ込んだところは、一人こっそりと読書に熱中することだけであった。

店の中の番台のはな先で、こんな内容のやりとりをしていると、奥の方で電話が鳴る。コレアンダー氏は、さき程バスチアンがこの店の中へかけ込んできた時、彼が読みふけていて、バスチアンと話し込んでいた間も片時も離さず手に持っていた本を椅子の上に置いて、電話が鳴っている奥の部屋へひっこんで行く。電話は長話になって、コレアンダー氏はなかなか出てこない。バスチアンの心は、磁石に引き寄せられる鉄のようにその本に引き寄せられて、その本を手にとって見る。それは、『はてしない物語』という標題の本であった。バスチアンは多少はためらいながらも、何が何なのかわからなくなり、無我夢中でその本をマントの下にかくして、だまってそっと店からぬけ出してしまった。頭をカッカさせながら学校に駆け込んだ。遅刻だ。今さら教室の中へ入って行く気にもなれず、彼はこっそり学校の屋根裏部屋の倉庫の中へもぐり込んでしまったのである。そして、今盗んできた『はてしない物語』という標題の本を読み始めたのである。ここまでをこの物語の第1場とすることにしよう。

ここで最速、少しややこしい問題が生じてしまった。表紙の色が少し暗い感じの赤であるとか、明の長方形だの暗の長方形だの、はたまた楕円形がどうしたこうしたとか、らちのあかないことを長々とまくしたてたあげくのはてに、やっと開いて読み始めたと思ったら、この本と全く同じ装丁で、全く同じ標題の本がこの本の中に出てきてしまったのである。それで混乱を避けるために、現に今我々が手に取って読んでいるこの赤っぽい表紙の『はてしない物語』という本をA本と呼び、バスチアンが盗んできて学校の倉庫の中で読み始めた『はてしない物語』という本をB本と呼ぶことにしよう。

この第1場は、A本のページで言えば、5ページから16ページまで、物語としての時間にすれば30分間かせいぜい1時間たらずのこと、バスチアンが登校する時の実際の出来事を語った部分である。しかし、この1時間たらずの出来事を通して、バスチアンの日常の状態・身の上がことごとく語られている。この第1場は、普通の本のように黒インクで印刷されてはおらず、茶色のインクで印刷されている。ただし、B本の『はてしない物語』という本の標題は、バスチアンがコレアンダー古書店で見た時は茶色で印刷されていたのに、学校の屋根裏部屋の倉庫の中にもぐり込んでこの本を読みはじめようとして手に取っ

